

田山花袋の紀行文論再考

島津 俊之*

Toshiyuki SHIMAZU

Rethinking Tayama Katai's discourses on travel writing

I はじめに

旅の印象を綴る紀行文と、数値情報を地図化するGIS(地理情報システム)のあいだには、途方もない距離が存するようにみえて、いずれも地理的実在そのものでなく地理的表象に過ぎない点で通底すると言ったら言い過ぎであろうか。むろん表象の仕方と精度に大きな隔たりがあるとはいえ、いずれも、かつて田山録弥=花袋(1872-1930)¹⁾が「その書いた時のみが精確だと言はれてゐる」と述べたところの、表象としての「地理」以上でも以下でもないと言いつつ放つたら(田山 1923a: 凡例2)、そこに渡れない河が存すると信じて疑わぬ数値主義者の失笑を買うであろうか。わたしが、田山花袋を〈民間地理学者〉として論じたのは(島津 2011: 42-48)、今から思えばこの種の認識を胸の裡に秘めていたからだともいえようが、その直接的な動因は、彼の初期の紀行文の一つである「月夜の和歌の浦」を多面的に読むための、コンテクスト解説の一作業としてであった。そのなかで、彼の紀行文論ともいうべきものを、必要と思われた範囲で析出することになったが、改めてこれは次のようにまとめられよう。

①花袋は当初紀行文に対して空想を交えた「文学」としての地位を与えていたが、後に紀行文は「地図の精確」と「絵画の妙味」を備えるべきと主張するに至った。いわゆる「自然主義」への没入は、その部分的背景をなすものであった。

②花袋のいう「絵画の妙味」とは、場所の間主観的な「直覚的印象」、換言すれば「万人行つて見ても成程と點頭く空気」から醸し出されるものであった。これは花袋の自己認識とは裏腹に、近代アカデミック地理学の一流派が重視したホーリスティックな地域像の把握という課題に近い面を有するものであった。

ところが上述の議論に対して立岡裕士氏より、『人文地理』誌の「学界展望」欄で批評を受けた。正確を期すため、当該箇所を原文のまま引用する(立岡 2012: 214)。

島津俊之「経験とファンタジーのなかの和歌の浦」(空間・社会・地理思想14)は田山花袋を文学者のみならず「民間地理学者」とも性格づけて、その作品を読解したものである。六つの観点を設定して周到な把握を試みているが、「テキスト生産の時空間的背景」の読みは不十分であろう。花袋の紀行文論が近世および明治期の紀行文に対する批判として呈示されたものである以上、そうした「背景」にも及ばねばなるまい。花袋は近世紀行文を否定的に語るが、島津が花袋に認める近代地理学的な特徴の多くは、むしろ近世紀行文の伝統(それは、たとえば板坂耀子が指摘してきた諸点である)を引くものに筆者には思われる。

本稿が、如上の立岡氏の批評に一部応える目的で書かれた面をもつことは確かである。もとよりわたしによる花袋の紀行文論のまとめは、それ自体を研究の主目的としたわけではないこともあって充分なものではなく、立岡氏のこのような、近世紀行文に対する花袋のまなざしなどは関心の対象から外れていた。そこで改めて花袋の紀行文に関する言説を時系列的に検討し直してみると、それは予想を遙かに超えて複雑な内実を有しつつ変転を重ねており、わたしの上述のまとめは②に関して一部修正を要しつつ(IV章参照)、花袋の紀行文論のクロノロジーのなかに改めて位置づけ直されるべきものだとわかった。本稿の主目的は、島津(2011)で花袋の紀行文論を示すものとして取り上げた三つの文章(田山 1906a; 無署名 1911a, b)に加えて、新たに検討した諸文章(田山 1901, 1906b, 1909a, b, 1917, 1920, 1927; 無

* 和歌山大学教育学部地理学教室

署名 1907, 1909, 1910) に依りつつ、この課題に取り組むことにある。そして、再構成された紀行文論の地理学史的意義に触れることや、本稿の内容と関わる限りにおいて立岡氏のコメントの妥当性を判定することも、付随的な課題となるだろう。行論の都合上、一部に島津(2011)と論述の重複がみられることを予め断わっておきたい。

しかし、花袋の紀行文論のクロノロジーという課題設定を後押ししたより大きな動因は、紀行文家としての花袋に触れた先行研究に対する不満である。立岡氏の批評を受けて、島津(2011)の執筆時に意識しなかった多くの先行研究²⁾に目を通し、教えられることも多かった半面、全体的にみて、以下の三点に関して不満が残った。

①花袋の紀行文それ自体の内容分析と、紀行文に関する花袋の評論的物言い＝紀行文論の分析のあいだの、分析レベルの差異と相互連関が必ずしも明瞭に意識化されていない。

②花袋の紀行文論が必ずしも包括的に再構成されているとはいえず、そもそも、花袋の紀行文論の変転や筆の揺れに言及した先行研究は殆ど存在しない。

③花袋のテキストを国民国家形成や帝国主義といった大きな物語に回収し、テキストの異種混溶性や、大きな物語から漏れ出るテキスト的現実を顧慮しない素朴国民国家論への寄り掛かりが散見される。

かかる研究情況が、埋めておくべき研究の空白領域の存在をわたしに感じさせるに至ったというのが、本稿執筆の直接的な動因である。先行研究で論じ尽くされた領域ならば、あえて一文を草する必要もないわけで、反面、対象の分析的画定とその位置づけが学術論文の常套手段ゆえ、本稿では花袋の紀行文論のクロノジカルな検討に焦点を絞り、それが現実の紀行文にどう関わっているかの検討は島津(2011)で断片的に試みたとはいえ、本稿ではこれを省いて今後の課題へと先送りすることにする。花袋の紀行文論とは畢竟、地理的表象がいかにあるべきかという物言いの一種に他ならず、その包括的検討は、地理学史と文学史の接点を考える上でも重要であろう。以下II章では、花袋の紀行文論における二つの〈起点〉とそのほごまに横たわる〈転回〉について論じる。III章では、〈第二の起点〉の後裔たる「ローカル、カラー」の立ち位置について論じ、IV章では紀行文論が筆の揺れを孕みつつ「地図の精確と絵画の妙味」の強調から「天然と人事との交錯」の賞揚へと変転してゆく過程を追う。V章では、紀行文論が

最終的に「人文地理」と「詩」の境界領域へと収斂してゆくありさまを明らかにする。そしてVI章では、他の紀行文への花袋のまなざしが、V章までで論じた紀行文論の変転や筆の揺れとの関わりでいかに変転し揺れていったか、そのなかで持続したものは何か、について論じる。クロノロジーの要諦は、持続と変転の具体相を明らかにすることに尽きるが、ここでわたしは前者にもまして後者に注目しつつ、花袋を変転や筆の揺れに向かわせた力の在処を探ることも目論むものである。

II 紀行文論の起点と転回

田山花袋の紀行文言説のなかで、最も初期のものと目されるのは、『続南船北馬』(田山 1901)の序文というべき文章のなかにみられる次の一文である。これまで注目されてこなかったが、わたしはこれを、花袋の紀行文論における〈第一の起点〉の萌芽と位置づけたい。〈第一の〉と形容詞を付すわけは、後述の如く、花袋の紀行文論はやがて〈転回〉を経て〈第二の起点〉に着地する、と主張したいからである。

わが旅行記は唯わが思を舒べわが情を遣りたるにとゞまる。さればわが旅行記を読むものは何等の異りたる風俗、何等の新らしき智識をも得べからず。否大方の君子は五百頁の中徒らに形容詞と問投詞の多きに呆れて、かゝる無益なる書籍を刊して世に問ひし著者の大胆なるに驚くなるべし。然りと雖もこれ皆一度わが山川に対して発せしところの真情、真意真趣にして、其間決して一片誇張の情、一点虚飾の念を交へざるは事実なり。これわれの大方君子の笑を買ふに過ぎずと知りつゝも、猶天地問われの如く旅行し、われの如く感傷し、われの如く天然を友とし、われの如く漫遊を事とするものあるを信じて、刻して世に問ふ所以なり。

『続南船北馬』は、好評を博した花袋の最初の紀行文集『南船北馬』(田山 1899)の続篇であり、後者と同じく、旅という行為や旅先の情景に託して自らの心情を吐露するといった体の作品であった。ここで花袋は、若輩者のかかる代物に注がれるであろう同時代の「君子」の視線を意識しつつも、恐らくは『南船北馬』の成功を恃みとして、同工異曲の続篇を再び世に問おうとしていたのであった。ここにみられるのは、自らが著した旅行記＝紀行文に対する自己認識に過ぎず、紀行文の在り方に関する言説、すな

わち紀行文論が展開されているわけではない³⁾。しかしこの自己認識は、五年後に出た『日本新漫遊案内』の「自序」における、下記の如き紀行文論の部分的基盤となっているのである(田山 1906a: 自序1)。

旅行記は宜しく絵画の如くなるべく、案内記は宜しく地図の如くなるべし。旅にありては旅行記無くも事は或は足りなん、されど、案内記なきは地図携へぬと均しく、其不便たる、実に言ふに堪へざるものあり。旅行記は文学なり、案内記は地理なり、旅行記は空想にてもありぬべし、案内記は断して事実ならざるべからず。

ここで花袋は、『南船北馬』や『続南船北馬』における自らの紀行文を正当化するかのようになり、そして自らの〈文学〉への渴望が滲み出たかのように、紀行文は文学であって空想を含んでよし、と言い切っている。反面、「絵画の如く」は「地図の如く」に対する物言いであって、「空想」と等置されるべきものとは限らず、旅先の印象特性の包括的描写を意味するものである(島津 2011: 46)。かかる物言いは花袋の紀行文論の起点として位置づけられるものであり、紀行文はフィクションを含みうる文学であって絵画の如くに描かれねばならない、という意見を、わたしは花袋の紀行文論の〈第一の起点〉と呼んでおきたい。

この〈第一の起点〉は、同じ年に刊行された『美文作法』のなかにも姿を現している(田山 1906b: 11-14)。「或る学者」と「或る詩人」を対話させた体の文章のなかで、花袋は前者に「今の記行文は虚偽が多くつて駄目だ。……旅行記を書くなら、よろしく精確無比でなければならぬ」と語らせる。一方で後者には、「我輩の旅行には感情、気候、精神状態が重なる働き手で、わが輩の智とか観察とかは存外無用である。わが輩の記行に虚偽が多い、誇張が多いと言ふが、それは其筈で、面白ければ虚妄でも好いのだ——否、虚妄と感ぜんのだ」と語らせている。そして花袋自身は、次のように評定するのである。

この二様の見方がおもしろいと思ふ。この正反対の言——即ち互に其目的の相違、方法の相違を顯はして居るので、前者は普通智識の上に打建てられた研究の態度、即ち実用文。後者は空想、感情を主として普通智識を眼中に置かぬ詩人的態度、即ち美文と言つて好いと思ふ。

後者の「普通智識を眼中に置かぬ詩人的態度」をも

否定しない花袋の紀行文論は、しかし翌年になって、かの「蒲団」の二か月半前に発表された「紀行文について」のなかで一つの〈転回〉を遂げる⁴⁾。これは花袋の勤務先であった博文館が発行し、他ならぬ花袋が編集を担当していた雑誌『文章世界』(2巻7号)に無署名で掲載され、二年後に『小説作法』(田山 1909b)に所収された。以下の文章は、一年前の『日本新漫遊案内』における「旅行記は空想にてもありぬべし」と同じ筆者のものとは一見思われぬ(無署名 1907: 62)。

紀行文と謂ふものが既に今の世の実際の描写でなくてならぬ以上、作家に由つて、其方向、其目的が違ふにしても、飽まで明治の今の特色が出なければならぬと思ひます。従つて紀行文を書く人は単に自己の感情のみを頼りにして、其の小さい主観で書くのは宜しくありますまい。……天下の絶勝をすぐれた筆で描くことは結構なことです、平凡な土地でも何でも筆に上せて好いと思ひます。田舎の村落にしても、無名の山水にしても、それを巧に詳しく描きさへすれば、立派な紀行文が出来ると思ふ。……紀行文を書く人は無論、其土地々々の産物、風俗、言語などには充分に注意して、これを活して遣はなければなりません。

ここで花袋は、『南船北馬』や『続南船北馬』における自らの紀行文を、「自己の感情のみを頼りにして、其の小さい主観で書くのは宜しくありますまい」と否定しているに等しい。それに代わって、紀行文は「今の世の実際の描写」であり、ために「写生的分子」を加えねばならず、「其土地々々の産物、風俗、言語」を紀行文に取り込む必要性が叫ばれることになる。感情的かつ主観的なものを重視する心から、実証的かつ写生的なものを重視する心への〈転回〉がそこに見出せるのであり、花袋のいわゆる自然主義への傾斜がその一背景をなすことは自他ともに認めるところであった(島津 2011: 46-47, 58-59)。

ただし、ここでの〈転回〉とは方向転換を意味するのであって、完全な断絶あるいは非連続を意味するものではない。「旅行記は宜しく絵画の如くなるべく」という『日本新漫遊案内』の物言いは、次の引用文のなかに言葉を換えて生きている(無署名 1907: 62)。

それから其土地のほひ——詳しく申せば感じを写さなければならぬと思ひます。たとへば青森弘前地方には、其地形、地質、沿革などから来る特色があつて其処に行く旅人は、暗いとか明るい

か、感じが好いとか悪いとか言ふことがありません。この感を充分に受けてそして活躍させて書かなければならぬ。……その各地方のにほひが完全に其文章の上に顕はれるやうになれば、紀行文も大に其価値を上げることを信じます。

ここでいう「土地のにほひ」が、『日本新漫遊案内』における「絵画の如く」を引き継ぐものなのであって、土地の印象特性の包括的描写を重視する姿勢は変わらない。だから上記の如く、「写生的分子を大に加へなければならぬ」のであり、そのために、「地形から沿革、地形沿革から生じた風俗、言語、これを第一に詳しく知る必要」（無署名 1907: 63）があるという論理が用意されるのである。ところが花袋は、かかる「土地のにほひ」を出すために、単なる〈知識〉以上のものを紀行文家に要求する（無署名 1907: 63-64）。

それからこのにほひ——感じと謂ふものが、京都なら京都をはつきり知つて居るといふばかりで出るものではありません。京都を詳しく知つて居て——そして成程かういふ処が此の舊い都の趣味だといふことを心から感じてそして筆を執るのです。……西洋の紀行文にも種類がありますから、一概には申されませんが、文学的のものは概してかういふ処に重きを置いて居るやうです。

テキストから「土地のにほひ」を立ちのぼらせるために、紀行文家は〈知識〉のみならず、研ぎ澄まされた〈感覚〉をも動員して、土地の印象特性を把握せねばならないというわけだ。そしてかかる「土地のにほひ」の漂うテキストが「文学的」と称されるのであって、これはやはり『日本新漫遊案内』における「旅行記は文学なり」との部分的連続性を示すものである。〈部分的〉としたのは、「紀行文について」と『日本新漫遊案内』では「文学」の意味が異なるからで、後者のそれが「空想」を含みうるものと捉えられているのに対し、前者では「土地のにほひ」が強調されている。この差異は、花袋の紀行文論における〈転回〉のメルクマールをなすものである。

だから「紀行文について」（無署名 1907）は、〈転回〉以後の花袋の紀行文論の起点をなすものといえる。この意味で「紀行文について」を、わたしは『続南船北馬』に続く〈第二の起点〉と位置づけたい。〈知識〉と〈感覚〉を以て「土地のにほひ」を把握すべし、というのがその要点である。

III 「ローカル、カラー」の立ち位置

花袋のいう「土地のにほひ」は、「紀行文について」の二年後に、同じく『文章世界』（4巻6号）に無署名で発表され、やはり『小説作法』に増補のうえ収録された文章の表題へと姿を変えた。「ローカル、カラー」と題されるその文章の主題は小説の書き方であって、紀行文論というよりむしろ小説論というべきものだが、それをささずして「到底真に迫る小説を書くことが出来ない」（無署名 1909: 180）とされる「ローカル、カラー」とは、二年前に花袋が「土地のにほひ」と呼んだものの延長上に位置する概念に他ならない。そして興味深いことに、花袋はここに至って「地理学」という概念を持ち出し、「ローカル、カラー」の説明を行うのであった（無署名 1909: 179-180）。

真に迫るといふ立場から言ふと、ローカル、カラーは実に重要なものとなる。何処にでも必ず其処に附随した特色がある。……地理学上からこれを見ても、峡谷中の民と高原の民と平野の民と都会の民と皆な其発達習慣気分が皆な違ふ。……作者はこの各地特有の気風習慣空気を出すことに注意しなければならぬ。

ここでの「ローカル、カラー」とは、まさに〈第二の起点〉の中枢をなす「土地のにほひ」の後裔であることがわかる。そして、後者を獲得するために紀行文家は〈知識〉と〈感覚〉を動員せねばならないのであったが（Ⅱ章参照）、花袋はここに至って、「ローカル、カラー」を獲得するためにもう一つ別の作業を要求する。それは、彼が他ならぬ「地理学」という文言を用いたことに関係しているのであった（無署名 1909: 180-181）。

さてこのローカルを描くといふことに就いて、作者は其地方と他地方とを比較して見る必要がある。此処に一人の年若い作者がある。其人が自己の住んで居る地方を描くとする。此作者が其土地ばかり知つて居て、他の地方を知らないと、其土地の特色が分明と頭に映つて来ない。都会をも知り、田舎をも知り、山の中をも知つて居る人で、始めて都会、田舎、山の中を分明と頭脳に映すことが出来る。雑誌の投書家などの作に、其地方のローカルを描いても、何うも感じがよく出て居ないのは、其『比較』といふことが充分でないからだ。だから、旅行といふことは、作者に大に必要なことだと思ふ。

「ローカルを描く」を描くためには地域比較が必要だという、地理学者にとっては至極尤もな物言いがこの場で登場する。鳥津(2011: 45)では1917(大正6)年の文章に同種の語り口を見出し、花袋を〈民間地理学者〉とみなしうることの一証拠としたが、その八年前に彼はすでに地域比較の意義を説いていたことになる。

花袋の紀行文論と小説論の連関を証拠立てるために、次の引用文ほど相応しいものはない。「ローカル、カラー」(無署名 1909)が増補されて収録された『小説作法』の、当該の増補部分には、「旅行記」という言葉遣いで思いがけなくも紀行文論が挿入されている。「村の特色が書けて居ないなど、批評された」自らのとある小説に関して、「折角書かうとした処をよくも解りもせず、書いて居ないなど、言はれるのは、甚だ遺憾だ」と憤りつつ、花袋は次のように書く(田山 1909b: 115)。

旅行記は其土地を踏んだ人にして、始めて其の眞価が解る。旅行をせずに、旅行記を面白がつて居るのは、唯、旅といふものに興味を持つて居るだけで、本当の旅行記の読者ではない。其書かれた土地に行つて見て、始めて成程よく書かれてあるか否か解る。

ここで花袋は、その小説で、紀行文と同じように「其口オカルを多少書いたつもりであつた」(田山 1909b: 114-115)のだが、現地に行ったこともない輩にはその眞価が解らないのだ、と拗ねているわけである。ここから、花袋にあっては、旅行記と小説における「口オカル」は同種のものとして認識されていたことがわかる。そして、この場合の「口オカル」とは、現地を肌で感じた読者が「よく書かれてある」と思う類のものであること、つまりその読者の現地感覚と親和し、読者の共感を呼び起こすような「口オカル」であることが要求されている。換言すれば、作者と読者に共有される間主観的な「口オカル」であることがわかる。これは「土地のほひ」でも同じことであつて、それゆえこの引用文は重要である。

ところで、「ローカルを描く」ための〈知識〉と〈感覚〉の位置づけについて、花袋の所論には微妙な筆の揺れが見出される。「土地のほひ」を重視する「紀行文について」(無署名 1907)では、〈知識〉と〈感覚〉は等価の存在として捉えられていたといえる。これに対して、上述の増補部分では、「ローカルが何うすれば旨く書けるか」という自問に対し、「頭腦の

修養問題になつて居るから、鳥渡此処で言ふことは出来ない」と口籠りつつも、花袋は次のような回答を用意する(田山 1909b: 114)。

唯、注意して見るといふこと、注意してスケッチをするといふこと地理上の関係を考へて見ること、地方語、風俗、習慣などを詳しく知ること、始めて触れた感じを忘れずにあることなど最も必要であらうと思ふ。

ここで前景化されるのは、むしろ注意深い観察や、「地理上の関係を考へて見る」という、まさに「地理学」という文言の使用と連動するかのような空間的考察、そして地理的知識であつて、「始めて触れた感じ」という〈感覚〉はいくぶん後景に退いている。さらにいえば、この「始めて触れた感じ」という〈感覚〉の在り方は、「成程かういふ処が此の舊い都の趣味だといふことを心から感じ」(無署名 1907: 63)という研ぎ澄まされた〈感覚〉の在り方とは(Ⅱ章参照)、いくぶん異なったものといわざるをえない。〈知識〉と〈感覚〉を以て「土地のほひ」を、つまり土地の印象特性を把握すべし、というのが花袋の紀行文論の〈第二の起点〉であるとわたしは前章で要約したが、戸坂(1938: 225)の言を借りれば、後者の〈感覚〉は「念を押され確かめられ点検された印象」としての「間接印象」に繋がらうのに対して、前者の〈感覚〉は「一遍カツキリの印象」としての「直接印象」を生みがちである。〈感覚〉が後景に退いているのみならず、花袋が賞揚する〈感覚〉の在り方それ自体も揺れているのであつた。

花袋はまた、『小説作法』の直前に発表した「旅と旅行記」なる小文において、「土地の風俗とか産業とか」が「ローカルカラーを見る上にも非常に必要」であるとして、次のようにいう(田山 1909a: 77-81)。

煙草を産する町には、煙草に就いての特色があり、織物を産する地方には織物に就いての特色があり、銘々それによつて細かい其地方地方の空気やら感情やらが、出来て居るのであるから、此点は特に詳しく観察する必要がある。旅に出れば、心を内に開くことは成たけ控へ目にして成たけ眼を外に縦ひまゝにするやうにしたい。……内に開いた心は停滞し易い、汚れ易い厭きが来るのが早い。それに比べると外面の現象は空想が交らないから、只単に山、川、町、村の無意味の推移だけでも、それでも常に目新しく感じられる。観察しやうとする心は、われを捨て、他を見やうとする心である。何物でも構はぬから新しきものを獲やうとす

る状態である。……興味と感情とにそゝのかされて書いた旅行記は、兎角空想が多く、過誤が多く、誇張が多い。自分では充分に観察したつもりで居ても、本當の観察は出来て居ない。

花袋の用いる語は、時にこの引用文における「感情」の如く、コンテキストに応じて異なった意味が与えられるので注意を要する。前者のそれが「ローカルカラー」をさすのに対して、後者のそれは「内に開いた心」から立ちのぼる主観をさしている。いずれにせよ、この引用文からは、偏りのない観察に基づく事實的知識の集積がより一層重視されていることがわかる。そして、〈感覚〉よりも事實的知識を優先させる筆遣いは、『小説作法』の同じ増補部分における次の文章にも顕著にみられる(田山 1909b: 112)。

写真は動かすべからざる事実である。下手な空想ででつち上げた芸術より、どれほど人に真なる幻像を起させるか知れぬ。私は下手な芸術より写真を費ぶものゝ一人たることを言うを憚らぬ。

このような花袋の筆の揺れは、〈感覚〉という言葉で表象されるものと、〈知識〉という言葉で表象されるものとのほぎまで、彼が揺れ動いていたことの顕われだとわたしは理解したい。〈感覚〉と〈知識〉は、互いに相容れない側面を有する概念であり、花袋は後年、〈知識〉の仲間たる「人文地理」と、〈感覚〉の仲間たる「詩」が、「性質として調和しないやうなところがある」(田山 1917: 13)と自ら語ってもいる(V章参照)。「土地のにほひ」が、「間接印象」を生み出しうる、研ぎ澄まされた〈感覚〉の助けをも借りて把握されるべきものであったのに対し、「ローカルカラー」は主に〈知識〉によって、さらにいえば地理学的な地域比較や空間的考察によって獲得されるべきものであった。そこでは、「直接印象」を生みがちな「始めて触れた感じ」という〈感覚〉が補助的に動員されるのであった。「土地のにほひ」も「ローカルカラー」も、いずれも間主観性を有するとされるが、花袋にあっては、それらに到達すべき道筋が異なっているのであった。これが、「土地のにほひ」とは微妙に異なった「ローカルカラー」の立ち位置である。

IV 「地図の精確と絵画の妙味」から「天然と人事との交錯」へ

島津(2011)において取り上げた、花袋の二つの紀行文論(無署名 1911a, b)は、本稿のこれまでの論述の流れに位置づけることで、その輪郭をより明確に浮き彫りにすることができる。以下では重複を厭わず、この段階での花袋の紀行文論を再構成しつつ、その位置づけについて論じてゆきたい。

『文章世界』(6巻6号)に掲載された「新しき紀行文」では、まず紀行文と小説の差異が次のように述べられる(無署名 1911a: 24)。

描写一方で紀行文を書くといふことは、しかし出来ぬことだ。紀行文と小説とは、其本来に於て、既に約束が違つてゐる。旅を記するの文は、何うしても叙述の筆を用るなければならない。

ここでの「描写」と「叙述」の差異は、花袋独特の用語法に関わるものであつて、少しく説明を必要とする。上記二つの紀行文論と同じく『花袋文話』(田山 1911)に所収され、その前年に『文章世界』(5巻10号)に発表された「文章新語」の一文を引いてみよう(無署名 1910: 2)。

自分を発足点にして書くといふ場合と、自分を傍に置いて、離して書くといふ場合と、この二つが文章を書く上に明かに区別されて居ると思ふ。

前者が「叙述」であり、後者が「描写」となる。叙述の結果として出てくるのは、作者の気配が読み手に感じ取られる文章であり、描写の結果として出てくるのは、作者の気配をできる限り消して「客観化といふこと」(無署名 1910: 2)が図られた文章である。小説家としての花袋は、「『長い叙述よりは短かい描写。』と私はいつもかう思つて、筆を執る」と語つた(無署名 1910: 4)。しかし同じ花袋は、紀行文は叙述にならざるをえないという。「一人の人が天然の万物と人間の生活を見て歩く」(無署名 1911a: 25)のが旅行であり、紀行文とはその人自身の叙述に他ならないというわけである。

ところが、この見解もまた花袋にあっては固定的なものではなく、筆の揺れはここでもつきまとうのであった。前年の「文章新語」において、花袋は小説における「印象的描写」を誉め讃えた後に、「紀行文でも、さういふ風にして書いて見たい」として、

以下のように記していたのであった（無署名 1910: 4-5）。

連絡などは何うでも好い。筋なども何うでも好い。其の通つて行つた処の土地のある感じ——地方的色彩の伴つた細かい感じをぼつぼつ書いて見たい。或は海の一隅、或は旅館の半時間、或は橋の上の十分、或は路傍の茶屋と言つたやうに——

花袋自身が一年後に、「作者の一人称で旅行を書いたもの」が紀行文だと明快に語っているにも関わらず（無署名 1911b: 3）、なぜその前年に真逆の物言いをしてきたのか、一見理解に苦しむのだが、答えは同じ「文章新語」のなかにある。そこで花袋は、「状態描写」を賞揚しつつ次のように書く（無署名 1910: 3）。

状態は描いて見せなければ、出て来ない。描くの中には、筆者の頭にその状態が分明と映つて居なければ出来ない。

つまりは、「ローカル、カラー」を獲得するための必須条件とされた（Ⅲ章参照）、注意深く偏りのない観察をなしえて、初めて「描写」ができるというわけだ。〈知識〉と〈感覚〉という両極のはざまを揺れ動いていたかみえる花袋は、ここでもまた、「描写」と「叙述」という、自ら設定した両極のはざままで揺れ動いていたようである。

では花袋のいう「新しき紀行文」とは、果たしていかなるものでありうるのか。花袋の声を聞いてみる（無署名 1911a: 27）。

直覚的印象と理解的印象との好い塩梅に調和されて、実際のロオカルがその句と句との間に出て、そして批評と感興とに富んだやうなものが出来たなら、さぞすぐれた旅行記が出来たであろうと思ふが、単なる理想に過ぎないかも知れない。つまり新しい紀行文は地図の精確と絵画の妙味を持つたものでなくてはならない。

ここでの「直覚的印象」と「理解的印象」の区別は、戸坂（1938: 225）のいう「直接印象」と「間接印象」の区別と重なりあう（Ⅲ章参照）。このことは、次の引用文から明らかである（無署名 1911a: 25）。

旅行をする人は、直覚が鋭敏であると共に、旅をする地方其ものゝ知識に富んでゐなければならな

い。知識がなければ、予めその知識を豊富にして置かなければならない。其地方の沿革古蹟は勿論、現今に於ける其地方の生活状態、産業、地形、さうしたものを詳しく研究して行けば行くだけの利益は必ずある。普通の人は只単に其処を通つて行くばかりであるが、さういふ風に研究して行つた人には、其地方の印象が必ず分明と映つて来る。直覚から来る印象の尊ぶべきは勿論だが、理解から来る印象は、其印象の輪郭を益々鮮かならしむるものである。若し人達の旅行は直覚の印象を重んずる旅行が多い。眼に映り、頭に残つたものだけで満足する。時には、地方の生活状態などは却つてその直覚を損すものだと思ふことすらある。しかし、旅は矢張知識に富んだものゝ旅が面白い。

「直覚から来る印象」が、「一遍カツキリの印象」としての「直接印象」の側に位置するのに対し、「理解から来る印象」は、「念を押され確かめられ点検された印象」としての「間接印象」の側に位置するといふ（戸坂 1938: 235）。この二種類の「印象」が、〈知識〉と〈感覚〉を以て「土地のほひ」を把握すべしと説く、花袋の〈第二の起点〉の延長上に在ることは確かだが、〈第二の起点〉における〈感覚〉が、「直覚から来る印象」にダイレクトに結びつくわけではない。なぜなら前者は、むしろ「間接印象」を生み出す研ぎ澄まされた類のものとしていたからだ（Ⅲ章参照）。むしろ、ここで「直接印象」としての「直覚から来る印象」の祖先となっているのは、二年前の『小説作法』で初登場したかみえる、あの「始めて触れた感じ」という〈感覚〉である。そして、「理解から来る印象」の祖先となっているのが、他ならぬ〈第二の起点〉における〈知識〉と〈感覚〉の双方なのである。結局のところ、花袋の紀行文論はこの時点で、〈第二の起点〉における〈知識〉と〈感覚〉を、「理解的印象」なる概念へと統合する方向に変転していったといふ。つまり〈知識〉の集積と、研ぎ澄まされた〈感覚〉が、「間接印象」としての「理解的印象」を生み出すというわけだ。これに、「始めて触れた感じ」という新たな〈感覚〉に由来する「直覚的印象」を巧みに調合して「実際のロオカル」を把握すべしというのが、「新しき紀行文」（無署名 1911a）における花袋の紀行文論なのであった。そして、その結果として生み出されるべき「新しき紀行文」が、「地図の精確と絵画の妙味」を併せもつべきものとされたのである。つまり、「理解的印象」が「地図の精確」を、「直覚的印象」が「絵画の妙味」を生み出すというのが花袋の論理であった。ここでわたしは、花袋のかかる「地図」と「絵画」という言葉遣いが、彼の「旅行記は直しく絵画の

如くなるべく、案内記は宜しく地図の如くなるべし」という〈第一の起点〉にリンクするものであることを確認したい(II章参照)。むろん素朴な先祖返りということではなく、かつて「案内記」の属性とされた「地図の如く」が、この時点ではそれと対置さるべき「旅行記」の属性とされたわけである。花袋の紀行文論は持続と変転の両面を有するのであった。

「新しき紀行文」の三か月後に発表された「現代の紀行文」(無署名 1911b)は、それまでの花袋の紀行文論の平易な文体とはやや異なり、いくぶん韜晦味を含んだ文章が含まれる。そして論調は、やはり上述の「描写」と「叙述」のはざまを揺れ動くものとなっている。そこでは、紀行文が「作者の一人称で旅行を書いたもの」「天然を記する文章」であり、「実用的の分子も含んで居れば、歴史的の面白味もその中に含まれて居る」とされるが、その直後に文章の難易度は一気に跳ね上がる(無署名 1911b: 72)。

だから事実の精確と言ふことが、小説などとは余程意味が違って来る。紀行文では、其精確不精確が実用的で、実際の事実と全く相連関して居るのに反し、小説では、実用的に害はなくとも、その精確不精確が独立した作品そのものに破綻を来して来る。一は即いて居る。一つは離れてゐる。

この文章は、上述の「描写」と「叙述」の文脈に位置づけることで、初めて十全に読み解くことができる。つまりここで花袋は、紀行文は実際の事実「即いている」叙述であり、ために叙述の不正確は事実と実用への違背となって現われるが、小説は事実から「離れてゐる」虚構の描写なので、描写の不正確は事実と実用への違背とはならないが小説世界への違背になるのだ、と述べているのである。

しかし花袋は、ここで「叙述」の側に留まっているわけではない。〈知識〉と〈感覚〉のはざまを揺れ動く花袋は、ここで再び〈知識〉の側に立ち、これまで「土地のほひ」とか「ローカル、カラー」と自ら呼んできたものを「空気」と呼び換えつつ、次のように書く(無署名 1911b: 76)。

空気と言ふことは、言はゞ漫然たる感じである。其時々々の心持が非常にそれに影響する。その影響をそのまま書いたとて、それで実際の空気は出て来るものではない。一度行き、二度行き、三度行つて、知識が感情に蔽はれないやうになつて、始めて其地特有な動かない萬人行つて見ても成程と点頭く空気が出て来るのである。

そして花袋は、この「萬人行つて見ても成程と点頭く空気」を得るために、「描写」への寄り掛かりを表明する(無署名 1911b: 80)。

小説ではないから、到底完全な客観描写は出来なにいにしても、もう少し観察を鋭敏にし豊富にして、萬人が皆な点頭くやうな観察をしたらば何うか。其処には新しい紀行文の起つてくる余地が十分にある。

ここにみられるのは、三か月前の「新しき紀行文」(無署名 1911a)で登場した「理解的印象」の類と「描写」との親縁関係の強調であり、それらへの寄り掛かりである。上記の「萬人行つて見ても成程と点頭く空気」は、かかる「理解的印象」の類からもたらされるのであった⁹⁾。それにしても、「理解的印象」とセットで登場したはずの「直覚的印象」は、いったい何処へいってしまったのであろうか。花袋の筆の揺れは、ここに極まったというべきか。

「現代の紀行文」は、最後に地理学者への批判を交えつつ(VI章参照)、前述の「空気」のよってきたる所以を説明する文章で締め括られる。それは、彼のいう「観察」を紀行文家は何処に向けるべきなのかの指南として在る(無署名 1911b: 81)。

雲を研究するとか、山を研究するとか言ふことは、スケッチ風にやつて行けば、非常に有益なことに相違ない。また天然といふものを人事を離して単独に研究するのも意味の多いことだ。地理学者の乾燥な研究に任かせて置くことは出来ないやうなところがある。しかし天然と人事と交錯した処には、一層深い細い色彩と空気とがある。……もつと人事にも近く、天然と人事との交錯を詳しく観察した旅行記、さうしたものが欲しい。

ここで花袋のいう「空気」とは、近代地理学の古典的表現を用いるならば、〈地人相関〉から生じる〈地域性〉と同種のものなのであった。花袋は、この時点での彼自身の近代地理学への視線とは裏腹に、紀行文家の「観察」は畢竟〈地人相関〉に向かわねばならない、と語っているに等しい。島津(2011: 47-48)で示唆したように、花袋の紀行文論は、近代地理学の地誌論と同種の認識に達しつつあったといっているのである。反面、これまで縷々指摘してきたように、花袋の紀行文論が、〈知識〉と〈感覚〉のはざまを、そして「叙述」と「描写」のはざまを揺れ動くものであったという点は、強調してもし過ぎることはない。こ

の点の評価に関しては、VII章で触れることになるだろう。

V 「人文地理」と「詩」のあいだ

大正期に入って花袋は、「紀行文」の語を含んだ単行本を二冊相次いで刊行した。『趣味の紀行文』（田山 1917）は他者の筆になる紀行文を集めたアンソロジーともいうべきもので、『旅と紀行文』（田山 1920）は自らの紀行文集である。しかし本章で注目するのは、双方の冒頭に据えられた花袋の紀行文言説なのであって、本篇ともいうべき紀行文それ自体は関心の対象外である。

これらのうち、前者の巻頭を飾る「紀行文の作り方」は、花袋の紀行文論のいわば集大成ともいうべき長篇である（田山 1917: 2-30）。ここで花袋は、紀行文の起源を「歴史の純なもの」としての「日記」に求め、後者が「家に静居してゐるものが書いた」ものであるのに対し、前者を「旅に出てあちこちと動いてゐるものが書いた」と規定する。これに対し、「歎いては金石の声を発し、悲しんでは悲痛の調を成すことから生じるのが「歌謡」であり、それは「芸術の純なもの」と花袋はいい、次のような中間的結論に達する（田山 1917: 3-7）。

従つて、『紀行文』の価値は、箇人の生存乃至行動の上に歴史を持つてあるといふ処に先づ最初の深い根柢を置いてある。……次に、『紀行文』の任務と言つては、この最初の根柢に更に『芸術』をつけ加へやうとするところにある。『日記』と『歌謡』、その二つのものを一つにしたやうなところを、『紀行文』は目ざして進んで行かなければならない。

この「日記」と「歌謡」という言葉は、それぞれ、書かれた事実に記録の積み重ね、すなわち「歴史」と、「歴史の上に独立してゐる」（田山 1917: 7）ところの「芸術」を表象するものである。この区別は、〈第二の起点〉からの変転の結果としての、「地図の精確と絵画の妙味」の区別（IV章参照）に一見相当するかのように見える。しかし話はいくぶん複雑であつて、そもそも、ここでの「日記」とは紀行文の原初的な起点に過ぎず、「芸術」が加味される以前の「日記」が、そのまま紀行文へと無媒介に移行するとされるわけではない。花袋は次のように書いている（田山 1917: 8-9）。

『紀行文』は『日記』であるが、……『日記』のやうに、唯、落附いて、自分の眼に映つて来るものゝあるを待つてばかりゐられない。是非とも此方から動いて行つて、観察もし、描写もし、踏査もして見なければならぬ。

簡単にいえば、「日記」は「叙述」だが、「紀行文」は「観察」に基づく「描写」だ、ということである。ここで花袋は、いったんは小説の側に限定していた「描写」のテリトリーを（IV章参照）、とうとう紀行文の側にも拡張してしまつたかにみえる。「叙述」の主観性から脱却し、〈地人相関〉からもたらされる間主観的な〈地域性〉を描こうとする花袋は、「旅を記するの文は、何うしても叙述の筆を用ゐなければならない」（無署名1911a: 24）という基底的認識を翻し、客観性を装う「描写」への志向を明確化したといつてあろうか。

過去の紀行文論への背馳は、上記の「踏査」に関わる物言いにも見出される。現実経験が豊富であればあるほど、描写の筆も生きてくるといふことの例証として、花袋はいう（田山 1917: 9-10）。

又『男女』の世界に浸つたものでなければ、好色の細かい心理は書けない。それと同じやうに、深山幽谷に入つたものでなければ、絶海の孤島に行つたものでなければ、めづらしい珍奇な土地に入つて行つたものでなければ、面白い色彩に富んだ、又はめづらしい驚かるゝやうな『紀行文』は書けない。

〈第二の起点〉で、平凡な土地でもその「にほひ」を描写すれば立派な紀行文ができると説いた花袋は、ここではそれ以前の、〈第一の起点〉に繋がる『南船北馬』や『続南船北馬』の頃に先祖返りしたかのようである（II章参照）。

その一方で、「地図の精確と絵画の妙味」（IV章参照）の延長上に在るかのような議論もみられる。同時代の紀行文は「実際振はない」と不満を洩らす花袋は、その理由を次のように書く（田山 1917: 12）。

人をしてその描いた地方、乃至海山の空気にうまう染み込むやうに感じさせるやうなものは少しもない。これと言ふのも、作者の内容——旅行又は地理的知識が不十分であるからではないか。

ここで花袋は、「地理的知識を全く度外してすふ紀行文家」は、「紀行文を全く『詩』にしてはうとし

てゐる」と批判し、返す刀でこうも斬る(田山 1917: 12-14)。

地理的知識のみに重きを置き、産業、地形交通などの人文地理でなければ『紀行文』ではないやうに思つてゐる人達にも私は與みしない。人文地理も大切であると共に、その自然の持つた『詩』も大切である。……この二つのものが、渾然として一つのものになるやうなものを、私は理想的な『紀行文』といふ。これはしかし中々難かしい。それに性質として調知しないやうなところがある。地理は飽までも科学である。研究である。『詩』は抒情である。気分である。飽までも作者の内部の発露である。

「調知」は「調和」の誤植である。ここで花袋が「人文地理」と称するものは、「地形」を含むゆゑに、むしろ〈地理〉あるいは〈地誌〉に相当するもので、彼自身「地理」と言い換えてもいる。そして「詩」とは、彼自身「芸術」と呼んだところの、「抒情」であり「作者の内部の発露」である。この「人文地理」と「詩」の区別は、一見、「新しき紀行文」(無署名 1911a)における「地図の精確と絵画の妙味」の区別に重なるように見える。そして「人文地理」とは、確かに「地図の精確」の子孫であるといひながら、では「詩」のほうは、「直覚的印象」から生まれるとされた「絵画の妙味」の子孫なのであろうか。「現代の紀行文」(無署名 1911b)では何処かに消え失せてしまったかにみえた「直覚的印象」が(IV章参照)、ここで再び「詩」を生み出すものとして蘇つたのであろうか。

残念ながら、答えは否である。そもそも、〈知識〉と〈感覚〉のはざまを揺れ動く花袋は、「人文地理」と「詩」とのはざまに横たわる緊張関係を「性質として調和しない」と自覚していた。そして、この緊張関係を止揚すべく彼自身が指南するのは、自己の文章のスタイルと、「科学—地理」の「真の状態」とが一致するよう修練するという道なのであった。これは要するに、地理のあり方を科学的に認識し、その認識内容を過不足なく文章化することを「自己のスタイル」たらしめてゆく、ということに他ならない(田山 1917: 14)。そのために、ここで花袋が要求するのは、もはや「直覚的印象」を生み出す〈感覚〉ではなしに、他ならぬ〈知識〉の側に属する「観察と学問」なのであった。「観察」については、以下のようなことが要求される(田山 1917: 17-20)。

何処に旅行しても、地図と引くらべて、完全に先

ず頭に入れる。山の脈、水の走路、さういふものは殊に第一に注意する。つづいて、山と水との間にある都邑、村落、つまりいかにして人間が生活してゐるかといふことを研究して見る。道路の位置からは、長い間の人間の歴史が考へられるものであるから、殊に研究が大切である。それから土地の地形——盆地とか三角洲とか、或は平野とか、或は山地とか、さういふものにも細かい注意を払ふ。何故なら、さうした地形に由つて、そこに住んでゐる住民の生活に種々相があらはれてゐるからである。それから一地方と一地方との連絡をよく見ることが肝腎である。一地方は一地方ばかりではよくわからない。比べて考へて見なければわからない。……それから土地の要点々々を見る必要がある。つまり点のやうなものである。そこを書けば、その周囲がすっかり背景になつてあらはれて来るといふやうな地方——さういふ地方が到る処にある。

かくの如く、地図を手にして〈地人相関〉や〈地域間関係〉の具体相を観察するという、ほとんど近代地理学の伝統的なフィールドワークと同じようなことを、花袋は紀行文家に対して要求するのであった。

では、「学問」のほうはどうか。ここまで読み進めてきた読者なら容易に想像できることだが、やはり花袋はいうのであった(田山 1917: 21-23)。

何うしても本当に「紀行文」を書くには、地理の科学的研究をやらなければならない。火山の研究、池沼の研究、海岸線の研究などは殊に大切である。気象なども知つてゐると、非常に気の利いた新しい『紀行文』が書けると思ふ。地理の科学的研究には、地形地質が一番先きだ。……次に歴史地理である。これは『紀行文』には非常に大切である。それに面白くもある。古来歴史上の人物の事蹟や址が地理に合せて考へると、一々生きて動いて来る。今まで歴史ばかりではおぼろげにしか知つてゐなかつたことがすっかり手に取るやうにわかつて来る。……次に動植物である。……鳥の研究などは『紀行文』に非常に必要である。渡り鳥のことなどを知つてゐると、山の記事などが一層新しく面白くなつて来る。それに、植物は動物に比しては、一層必要である。野の花、山の花、それを唯美的いと書いてすぎて了ふよりも、もつと詳しく書けばひとり手に新しい色彩が文の上に生きて動いて来るわけである。其他、産業の研究も必要だ。……桐生とか、足利とか、越後の小千谷とか、さういふ機業地のカラアは、織物を研究しないでは実はよく描けない。

花袋が紀行文家に要求する「地理の科学的研究」とは、旅先の自然から人文に跨る地誌的知識の修得に他ならないのであった。『『紀行文』の内容としての作者の知識の修養も中々大変だ』（田山 1917: 23）と嘯く花袋に、わたしは民間地理学者としての矜持を見出すが、後進の画家に対して似たようなことを呟いた同時代の別の民間地理学者の姿も脳裏をよぎる。ともあれ、かかる「観察と学問」に精を出すと、紀行文家には次のようなことが生じてくると花袋はいう（田山 1917: 14-15）。

さういふ風に心懸けて、段々進んで行くと、山の成因、又は湖水の成因が却つて『詩』になつて行くのであつて、決してその感興を殺ぐものではなくなつて来る。土地に出来る農産物、産業、さういふものも却つてその土地の気分をあらはす好材料とこそはなれ、決して邪魔にはならないものであるのがわかつて来る。産業、地形ばかりでなくあらゆるものがさうである。あらゆるものがその土地の気分をあらはす上に役立つて来るのである。

以前は「土地のほひ」とか「ローカル、カラー」と呼ばれていたものが、ここでは「土地の気分」として表現されている。それが花袋のいう「詩」であつて、すなわちそれは「作者の内部の発露」なのであった。「観察と学問」の結果として、「地理」のあり方を科学的に認識でき、その認識を過不足なく「自己のスタイル」として文章化できたとき、そこに「土地の気分」すなわち「詩」が、換言すれば「芸術」が宿るというのが、花袋の紀行文論の到達点といつてよい。同じことは、「土地のカラア」としても表現されている。そこに到達するための課題として、花袋はいう（田山 1917: 16）。

修養から得た知識と、時の自然に教へて呉れる理解と、実地調査とか三叉形を成して作者の前に横つてゐる。

この段階における花袋の紀行文論に、もはや〈感覚〉や「直観的印象」の出る幕はないといつてよい。花袋は、地理学に精通することが「詩」のある紀行文を書く早道だと言っているに等しい。ここでわたしは、花袋と同時代を生き、官を辞した後は画家として立ち、やはり花袋と同じく民間地理学者としての側面を有した人物が、同種の認識に到達していたことを思わずにはいられない（島津 2012: 65-68）。高島北海（1850-1931）は、山水を構成する諸要素の自然

理的な相互関連の態様を包括的に認識することこそが、山水の「美」の認識につながると説いたのであった。また高島は、自然環境の諸要素の相互関連から生じるところの、場所の相貌的な「空気」にも注目したのであつて、それはここで花袋のいう「土地の気分」に通じるものである。対象の地理学的認識と表象が「芸術」や「美」の認識と表象につながる、という語りを、近代の民間地理学者としての田山花袋と高島北海が共有していたことは重要である。それが、時として「芸術」や「美」の国家主義的あるいは帝国主義的な賞揚に向かうことにもなりうるのだが、それはまた別箇の研究課題として在る。

1920（大正9）年刊行の『旅と紀行文』は、「紀行文といふこと」と題された小文から始まっている。ここでわたしは、またもや花袋の筆の揺れを見出すことになる（田山 1920: 3-4）。

山水の勝とか、古跡とか、さういふものを尋ね廻つて歩くのばかりが旅ではない。……平凡な野にも、町にも、村にも興味を持つて見るやうにならなければ本當ではない。

『趣味の紀行文』では〈第一の起点〉の前段階にまで先祖返りしたかにみえた花袋が、ここで再び〈第二の起点〉における認識に立ち戻っている。〈知識〉と〈感覚〉、そして「叙述」と「描写」のはざままで揺れ動いてきた花袋は、ここでもまた、「山水の勝」と「平凡」のはざままで揺れ動いていたようである。

『旅と紀行文』における「紀行文といふこと」が、前言を翻す物言いで埋め尽くされているわけではない。大方の論調は、『趣味の紀行文』における「紀行文の作り方」にみられる紀行文論の敷衍である（田山 1920: 1-3）。

紀行文を書くには、何うしてもあちこちを歩いて見なければならぬ。また単に学問的、研究的であつても面白くない。地理、歴史科の学生の書くやうな紀行は、学問としては面白いけれど、また有用であるけれども、どうしてもそれでは物足らない。主張その中に作者自身が動いてゐて、その学者と一緒に読者も動いて行つてゐるやうなものでなくては十分でない。しかし、情緒ばかりを書いてゐる『詩』であつてもいけない。飽までもその土地土地のカラアをあらはすやうに心かけなければならない。従つて、地理、歴史、産業、風俗、すべて紀行文には必要である。何故と言へば、その産業の如何により、地形の如何により、その土地の持つた感じなりカラアなりがすつかり変つて

来るからである。…… 昔城下であつた町と街道の宿駅であつた町とでは、その感じやら空気やらが非常に違ふ。そして、これ等の空気や気分は日々それを紀行文の中にあらさなければならぬ。…… 従つて、写生の方法は、ある程度まで必要である。はつきりと見、はつきりと知り、はつきりと書かなければならぬ。しかし所謂写生文はあまりに瑣鎖である。Tidiousである。また一ところにのみ執着しすぎてゐる。紀行文に必要な『比較』『理解』『包含』と言つたものが欠けてゐる。

引用文の「見なければ」は「見なければ」の、“Tidious”は“Tedious”の誤りであろうが、紀行文とは「学問」と「詩」のはざまをゆきつつ「土地土地のカラア」や「感じ」や「空気」や「気分」を表現すべきとする物言ひは、『趣味の紀行文』における所論を引き継ぐものである。紀行文に必要な「比較」とは、他の土地との比較において「カラア」を描くことであり、「理解」とは観察と学問を以て間主観的な「カラア」を把握することであり、「包含」とは「カラア」がそこに包含されて匂い立ってくるような文章を書くことであろう。花袋の紀行文論にみられるテキストは時として断片的であり、その意味を理解することは、コンテクストを参照することなしにはしばしば困難である。花袋の紀行文論のクロノロジーとは、まさに、かかるコンテクストの参照のために在ったといつても過言ではない。かかる「カラア」を、花袋が現実の紀行文のなかでいかに活写してきたのかは、むろん別箇の研究課題として在る。「平凡な紀行文も、決して平凡でなく書くことが出来て来た」（田山 1920: 4-5）と豪語する花袋の自信の源泉は、果たして何処に在ったのであろうか。

VI 他の紀行文へのまなざしとその変転

花袋の紀行文論のクロノロジーは、前章までの論述で完了したようにみえて、じつはそうではない。他の紀行文に対する花袋の言説もまた、彼の紀行文論の重要な要素をなすのであって、それ自身のクロノロジーを別に必要とする。ただし、他の紀行文に向けられた花袋の物言ひを網羅的に検討する紙幅はなく、ここでは前章までの論述に関わる花袋の言説に対象を限定し、その時系列に沿った検討を行つてゆきたい。そうすると、これまで論じてきた花袋の紀行文論に〈転回〉や変転や筆の揺れがみられたように、他の紀行文に対する花袋の言説のなかにも変転

や筆の揺れが見出されることになる。

検討の出発点は、紀行文論の〈第二の起点〉と位置づけられる「紀行文について」（無署名 1907）である（II章参照）。そこでは「明治以前の」紀行文に総じて批判的な視線が注がれ、「簡潔を貴んだ叙事一点張りのものばかり」で、「文学としての価値は甚だ乏しい」と斬り捨てられる（無署名 1907: 60）。橘 南谿（1753-1805）の『東西遊記』は「面白い紀行文」のうちに数えられるが、「要するに事と境を平易に叙しただけで、まだ発展の余地はいくらもありませう」と評される。松尾芭蕉（1644-1694）の『奥の細道』についても、「俳句のみを中心とせず、文章に力を入れたなら、今一層すぐれたものが出来たでせう。惜しいかな、徳川時代にはさういふものは無い」と断じる（無署名 1907: 60-61）。〈第二の起点〉で「土地のほひ」を重視した花袋は、この時点ではそれらに「ほひ」を見出していなかったとみえる。むしろ花袋が模範とするのは、「繊細な流暢な詩的な西洋の名家の紀行文」であり、「アーサー・シモンズ氏の書いたベニス紀行」⁶⁾や「ドオテエの筆」⁷⁾が賞揚される。花袋によれば、これらは「西洋の紀行文」のうちでも「文学的のもの」であつて、花袋はそれらのなかに「土地のほひ」を見出していたといふ（無署名 1907: 61-64）。興味深いことに、井原西鶴（1642-1693）の『好色一代男』が、「世之介が旅に出たあたりの文章は、一面おもしろい紀行文だと私は思ひます」として、「瀬戸内海の船着、賑かなさまが画のやうに眼の前に見える」などと持ち上げられる（無署名 1907: 61）。花袋は近世のフィクションのなかに、むしろ同時代のノンフィクションを超える「土地のほひ」を見出していたわけである。ちなみに西鶴は、二年後に出た『小説作法』のなかでも次のように激賞されている（田山 1909b: 110-111）。

私はいつも西鶴を読む度に思ふが、此作者位日本でロオカルに注意したものはない。…… かれは実際に重きを置いて書いた。そして多くかれが自ら見聞したことを書いた。だから元禄の社会、人間、風俗と言ふものが写真を見るやうに読む者の眼に映る。それに割合にかれは心理といふものを書いて居ない。事実を並へて心理を其中に求めさせるといふ風に遣つて居る。

ここでの「ロオカル」とは、〈第二の起点〉の延長上に設定された「ローカル、カラー」と同種のものであつて、「土地のほひ」を引き継ぐ花袋独自の概念である（III章参照）。そして「事実を並へて心理を其中に求

めさせる」とは、「人文地理」と「詩」のはざまにこそ理想的な紀行文が在る、とする花袋の後年の語りに繋がる物言いである（V章参照）。「西洋の紀行文」を模範とする花袋は、西鶴のテキストのなかにも、同じ模範を見出していたといえようか。

『小説作法』の二年後に書かれた「現代の紀行文」（無署名 1911b）は、じつは大半が過去や同時代における日本の紀行文に対する論評に費やされ、論調は総じて辛口である。前述した南谿の『東西遊記』や芭蕉の『奥の細道』は、ともに旅行の詳細な行程を明記していない点や、「土地々々の状態」を描いていない点が批判的となり、後者は「俳諧の詞書にすぎないと言ったやうなところすらある」とまで叩かれている（無署名 1911b: 73）。一方で、西鶴の『好色一代男』は「半は旅行記になつてゐる」と評価され、十返舎一九（1765-1831）の『東海道中膝栗毛』も「矢張一種変体の旅行記である……其土地特有のカラーも書いてある」と賞揚される（無署名 1911b: 80）。

花袋は「現代の紀行文」のなかで、「明治になつてからの紀行文」を四つに分類する。すなわち、①「旅行を其まゝ書いたもの」、②「やゝ案内記の臭味を帯びたもの」、③「自己の抒情を以て主としたもの」、④「地理的探検に旅行の趣味を加へたやうなもの」、である。これらに総じて批判的な言葉が投げられるが、①の仲間とされる幸田露伴（1867-1947）の『枕頭山水』（幸田 1893）は以下のように激賞される（無署名 1911b: 76-77）。

『枕頭山水』は明治の文壇で出来た紀行文の中で、最もすぐれて居るものゝ一つである。それは出た当時にもさう思つたが、今でも矢張さうだ。露伴はその頃でも知識と理解とに富んで居た。……旅をしても、他の旅行家のやうに何処も彼処も感情で面白がつて見るやうな弊がない。……岩手山登山の條などは、作者と事実と巧にくつついて、まことに叙事の妙を得てゐる。

この「知識と理解」とは、「現代の紀行文」の半年前に発表された「新しき紀行文」（無署名 1911a）における「理解的印象」の延長上に位置する物言いであつて、〈知識〉の集積と研ぎ澄まされた〈感覚〉がもたらす「理解的印象」が紀行文には不可欠とする所論に合致するものである（IV章参照）。反面、1893（明治26）年に『枕頭山水』が「出た当時にもさう思つた」のであれば、紀行文論の〈第二の起点〉たる「紀行文について」（無署名 1907）や、それが所収された『小説作法』（田山 1909b）において『枕頭山水』への言及

がないのは一見不審である。しかし、〈第二の起点〉で花袋が「土地のほひ」に傾斜していたことを考え併せれば（II章参照）、「旅行を其まゝ書いたもの」で「知識と理解」に特化した『枕頭山水』に、当時の花袋が「土地のほひ」を見出していなかったということかもしれない。他の紀行文に関する花袋の評価規準は、彼の紀行文論と同様に、時とともに変転し揺れ動く性質のものであつたといえる。

評価規準の変転は、上記④に関わる言説にもみられる。小島烏水（1873-1948）の大著『日本アルプス』（小島 1910-15）に関して、花袋は「紀行文といふよりも地理研究に近い書である」と評し、烏水が「才と文とを地理的研究に浪費するを惜むの念に堪へない」（無署名 1911b: 80-81）と嘆く⁸⁾。この段階で、紀行文においても「離れて居る」ところの「描写」を重視しつつあつた花袋は（IV章参照）、「地理学者の乾燥な研究」に「芸術味」あるいは「離れた味」は見出せないと考えていたのである（無署名 1911b: 81）⁹⁾。また、日本のみならず西洋の地理学者に対しても、同様の認識が半年前の「新しき紀行文」で表明されていた（無署名 1911a: 27）。

西洋の旅行記は、学者の地理的旅行記と、文学者の文学的旅行記と二種類ある。彼方で旅行記と言へば、重に学者の地理旅行記か、探検者の探検旅行記かを指してゐる。モウパッサンの『水の上』のやうなものは旅行記と言つて居ない。其の学者の旅行記は、文章も旨く、学術的知識にも富んでゐるか、しかしわれ等の要求するやうな旅行記ではない。

ところが花袋は、1920（大正9）年の『旅と紀行文』では一転次のように書く（田山 1920: 47）。

小島烏水は旅行家としてよりも、日本アルプスの最初の登攀者の一人としてより以上にきこえてゐる。文章もまた巧みである。『日本アルプス』の大著がある。

こうした筆の揺れの背後には、「地理的研究」に対する花袋のまなざしの変転がある。すでに『小説作法』（田山 1909b）で花袋は「地理学」の文言を用い、「ローカルを描く」ための地域比較の重要性を説いていた（III章参照）。そして、「土地のほひ」や「ローカル、カラー」の末裔たる「土地の気分」や「土地のカラー」を把握するために、もはや〈感覚〉ではなしに「観察と学問」を要求する『趣味の紀行文』の花袋は

(V章参照)、「新しき紀行文」における前言を翻すかのような物言いをやつてのける(田山 1917: 25)。

外国では、普通の地理学者の書いた『紀行文』でも非常に趣味に富み、色彩に富んでいる。例のヘチン博士の『探検記』なども非常に面白い。文章もかなり立派である。それに比べると、日本では、学者の書いたものは、多くは乾燥無味である。折角のすぐれた研究が唯研究そのままにしてあるので、何うも普通の読者の興味を惹かない。

日本の地理学者の文章に対する評価は相変わらず厳しいが¹⁰⁾、「ヘチン博士」とは中央アジア探検で著名なヘディン¹¹⁾のことで、外国の地理学者に対する評価は肯定的なものへと変転している。その背後には、上述の如き「地理的研究」へのまなざしの変転があったのである。

他の紀行文への評言に関して、『趣味の紀行文』の筆が揺れていることは上記の例に留まらない¹²⁾。「紀行文について」(無署名 1907)や「現代の紀行文」(無署名 1911b)では批判された芭蕉の『奥の細道』が、『趣味の紀行文』では一転評価されている(田山 1917: 170-171)。

俳味のある『紀行文』は何と言つても、芭蕉の『奥の細道』だ。時が、長く経つた時が、苔をつけ価値をつけたやうな所があるかも知れないが、兎に角あの簡浄は、あの野趣は及ぶことが出来ない。外国の細かい描写も好いけれども、外国には求めてもないあの筆致が忘れられない。

『趣味の紀行文』における「土地の気分」あるいは「土地のカラー」の追求は、そこに「詩」すなわち「芸術」を見出すことと表裏一体であった(V章参照)。花袋はこの時点で、『奥の細道』にかかる「詩」あるいは「芸術」を見出していたということであろうか。

こうした近世紀行文へのまなざしの変転は、決して一過性のものではない。三年後に出た『旅と紀行文』では、芭蕉の『奥の細道』のみならず橋 南谿の『東西遊記』にも肯定的なまなざしが注がれているのだ。前者に関して花袋は次のようにいう(田山 1920: 7-8)。

芭蕉の『奥の細道』にあらはれてゐる行程なども面白かつた。……笠島では『笠島はいつこ五月のぬかり道』とよんでゐるが、これなども、この短かい句の中に、泥濘の深い、雨の多い期節の街道のさ

まが歴史の古跡と一緒に雑り合つて、そこに出て来てゐるやうなのを感じずにはゐられなかつた。

後者に対しては、このようである(田山 1920: 13-14)。

玖摩川を下つて、神瀬の鍾乳洞を書いてゐるあたりも、かれが尋常一様の旅行家でないことがわかる。人に聞いた五家荘の記事などでも、かなりの精確と理解とを持つてゐる。…… 尠くとも、南谿は、当時にあつてすぐれた旅行家であつた。そしてまたそれに相応しいすぐれた紀行文を書いた。

前章までにおいても度々言及したが、花袋のこうした筆の揺れは一見、読者を面食らわせるものである。しかしこれもまた、前述の花袋の評価規準の変転に関わるものとみることができよう。つまり、〈感覚〉でなく「観察と学問」を要求する『趣味の紀行文』以降の花袋の眼に、以前は「叙事一点張り」(無署名 1907: 60)の仲間に思えた南谿や芭蕉のテキストが、新たに「詩」や「精確と理解」を纏つて立ち現われてきたということであろう。

『旅と紀行文』の七年後に出た『古人の遊跡』でも、芭蕉と南谿はまとめて評価されている(田山 1927: 122-123)。

いろいろな旅行記を比べて見ると、そのうまさ在于て、またその心境の静けさに於ては、何と言つても芭蕉の『奥の細道』にとゞめをささなければならなかつた。矢張、旅もその人である。その人の持った芸術である。…… 芭蕉について指の屈せらるゝのは、何と言つても、橋南谿であらう。『東遊紀』『西遊記』当時にあつては、かなり評判の本であつたであらうといふことは今でもわかる。

亡くなる三年前の文章であり、円熟した晩年の花袋は芭蕉や南谿の「芸術」を解するようになったのだ、というだけでは物足りない。その「芸術」の内容こそが問われねばならないからだ。そしてそれこそが、花袋が「詩」と呼んだものであり、間主観的な「土地のカラー」と呼んだものなのであった(V章参照)。

しかし、他の紀行文に花袋が向けたまなざしや評価規準は、変転し揺れ動くばかりではなかつた。本章での検討の出発点たる「紀行文について」のなかで、「西洋の名家の紀行文」(無署名 1907: 61)を評価した花袋は、以後『旅と紀行文』(田山 1920)に至るまで、一貫して「西洋の…… 文学者の文学的旅

行記」(無署名 1911a: 27)への憧憬を隠そうとしない。むしろ単なる憧憬でなく、そこには「土地のほひ」から「土地土地のカラア」に至る、花袋の紀行文論の中核をなす評価規準が、つねに根底に置かれているのを見ることが出来る。そしてまた、花袋の紀行文論は、かかる「西洋の名家の紀行文」との対話のなかで生成してきた側面をも有するといえる。

『趣味の紀行文』では、冒頭の「紀行文の作り方」において、「ピエル・ロチの作」¹³⁾が「小説ではあるが、一面『紀行文』らしいカラアが全体に漲つて」と評される(田山 1917: 10)。かつて(第二の起点)における「西洋の紀行文」の評価に動員された「土地のほひ」や、西鶴の『好色一代男』や一九の『東海道中膝栗毛』の評価に動員された「ロオカル」や「カラー」に類する評価規準が、ここで再動員されているわけである。また、花袋は1909(明治42)年の時点で、「ローカルを描く」ためには地域比較が必要と説いていたが(Ⅲ章参照)、その「比較研究から生じた複雑な観察と理解」を見出しうる西洋の紀行文として、花袋は「キプリング¹⁴⁾の『インランド、ポエーヂ』フロオベル¹⁵⁾の『ブリタニイ紀行』ドオデエ¹⁶⁾の『ポオ島へ』モウパッサン¹⁷⁾の『水の上』」を挙げる(田山 1917: 24)。この「複雑な観察と理解」もまた、比較研究から導出されると花袋が説く「土地のカラア」(田山 1917: 15)に関わるものに他ならない(V章参照)。

『趣味の紀行文』の本篇たる「作例二十二篇」には、モーパッサンの「アフリカ旅行記」とロチの「大廃墟の落日と夜景」が含まれるが、前者の末尾において花袋は、「割合に外面的で、静かな巴里人の旅行と云つたやうな気分が多分に出てゐる。……観察も細かいし、理解も深い。……いろいろなものを注意し、描写し、叙述してゐる」と注記する(田山 1917: 48-49)。興味深いのは、冒頭の「紀行文の作り方」において「叙述」から「描写」への傾斜を強めたかに見える花袋が(V章参照)、ここで再び「叙述」を持ち出していることである。ここでも花袋は、やはり「叙述」と「描写」のはざまを揺れ動いていたといえることができる。

後者の末尾において花袋は、日本滞在の経験の有する海軍将校ロチを次のように激賞する(田山 1917: 139-141)。

ピエル・ロチの作は『紀行文』を学ぶ人の是非見なければならぬものである。かれの作は、文章はやゝ外面的にすぎるやうな嫌ひはあるけれども、その結構といひ、描写といひ、非常にすぐれてゐ

て、いかにも色彩がはなやかである。かれはかれの海軍生活を利用して、世界の果てから果てまで遊んだ。……永くつて一年位しかゐない外国人が、兎に角これだけに観察したり描写したりしたかと思ふと、決して馬鹿にすることが出来ない。……精を極め細を極めてゐる。又立派に『詩』として受取ることが出来る。……ロチの書いたものに比べると、日本の『紀行文』などは、非常に単純でそして貧弱である。殆ど体を成してゐないと言つても好い位である。

ここで花袋は、ロチの豊富な旅行経験をバックボーンとした地域比較に基づく、「観察」と「描写」を誉め讃えているわけである。そしてまた、そうして書かれた彼の作品に「詩」を、すなわち「芸術」としての「土地のカラア」を見出している(V章参照)。反面、日本の紀行文に対する物言いは苛烈だが、一方で同じく「作例二十二篇」に所収された、島崎藤村(1872-1943)の「波の上」や国木田独歩(1871-1908)の「武蔵野」、そして吉江孤雁(1880-1940)¹⁸⁾の「印度洋上より」に対しては、モーパッサンやロチと同様の規準で賛辞が寄せられている。藤村は「モウパッサンの『水の上』を思はせる作だ」として、「自然が自然だけで描かれるやうなことはなく、ぴつたりと氏の内部のスタイルと一致してゐる」と評価される(田山 1917: 107-109)。これは、冒頭の「紀行文の作り方」における、自己の文章のスタイルと「地理」の「真の状態」を一致させることで「詩」が生まれるという紀行文論に合致するものである(V章参照)。独歩と孤雁はいずれも、「カラア」が描けていることで評価されている(田山 1917: 233, 253)。ここでもまた、花袋の筆の揺れが観察されたわけである。

『趣味の紀行文』の三年後に出た『旅と紀行文』では、「土地土地のカラア」を表現した「本当の意味の紀行文」として、やはりロチやモーパッサンの作品が引き合いに出される(田山 1920: 2-5)。(第二の起点)以降の花袋の紀行文論にとって、「西洋の紀行文」は終始模範であり続けたといえることができる。まなざしの変転や筆の揺れが目立つ花袋の紀行文論にあって、かかる持続性はひととき目立っている。西洋文学は、変転し揺れ動く花袋の紀行文論を根底で支える土台の如きものであったといえようか。

VII おわりに

本稿では紀行文の在り方についての田山花袋の物

言いを〈紀行文論〉とみなし、そのクロノジカルな検討を試みてきた。それは〈転回〉と変転、そして度重なる筆の揺れによって特徴づけられるが、論旨は一先ず以下のようにまとめられよう。

花袋の紀行文論における〈第一の起点〉の萌芽は1901(明治34)年の『続南船北馬』にみられたが、それは1906(明治39)年の『日本新漫遊案内』で、紀行文の抒情性とフィクション性を許容する物言いとして定式化された。しかし一年後の「紀行文について」のなかで、花袋は過度の抒情性からは距離を置き、かつフィクション性を否定する物言いに転じた。かかる〈転回〉の帰結として、紀行文は〈知識〉とそれに裏付けられた〈感覚〉を動員して間主観的な「土地のほひ」を把握すべき、という〈第二の起点〉が形成された。しかし〈知識〉と〈感覚〉のはざまを揺れ動く花袋は、その二年後に、「土地のほひ」を「ローカル、カラー」という地理学的概念へと組み換えるに至った。そこでは〈知識〉への傾斜に基づく地域比較や空間的考察が重視されるが、「始めて触れた感じ」という〈感覚〉も動員すべきとされた。1911(明治44)年の「新しき紀行文」では、〈第二の起点〉における〈知識〉と〈感覚〉が「理解的印象」へと、そして「始めて触れた感じ」が「直覚的印象」へと結びつけられ、前者が「地図の精確」を、後者が「絵画の妙味」を生ぜしめるとされ、そこから「実際のロオカル」が立ち上がる紀行文が求められた。そこでは作者が前面に出る「叙述」に力点が置かれるが、作者の気配を消して客観性を装う「描写」を自らの小説の恃みとする花袋は両者のはざままで揺れ動く。同年の「現代の紀行文」では「理解的印象」から結果する「描写」が再び強調され、「天然と人事との交錯」から生じる「色彩や空気」を対象化することが求められ、〈感覚〉としての「直覚的印象」は姿を消した。かかる〈地人相関〉や〈地域性〉への傾斜は、1917(大正6)年の『趣味の紀行文』における「観察と学問」の重視に結びつく。そこでは〈地人相関〉や〈地域間関係〉の観察と、自然から人文に跨る地誌的知識の修得が、「人文地理」と「詩」を併せもつ「土地のカラー」の発現に繋がるとされた。三年後の『旅と紀行文』でも同種の論が展開されるが、花袋は「山水の勝」と「平凡」のはざまを最後まで揺れ動いていた。

紀行文論が変転したのと同様に、他の紀行文に対する花袋のまなざしもまた変転した。1907(明治40)年の「紀行文について」では、前近代の紀行文が批判される一方で、西鶴の作品が紀行文として賞揚された。この傾向は1911(明治44)年の「現代の紀行文」にも引継がれ、そこでは明治の紀行文家や地理

学者の文章にも批判的な眼が注がれた。しかし地理学的考察の効用を認めていた花袋は、1917(大正6)年の『趣味の紀行文』ではヘディンを評価し、「詩」を必須とする紀行文論への変転は芭蕉への視線を一変させた。1920(大正9)年の『旅と紀行文』や七年後の『古人の遊跡』でも、芭蕉と南谿が併せて評価された。西洋文学への視線は「紀行文について」から『旅と紀行文』に至るまで肯定的で、「観察と理解」や「カラア」を賞揚する視線は、『趣味の紀行文』における明治の紀行文家への評価にも反映した。かかる西洋文学への憧憬が、花袋の紀行文論の土台をなしていたことが窺える。

本稿では、時に己の過去の物言いを顧慮せず書き飛ばしたかにもみえる花袋の諸テキストを、学術専門誌の査読者の眼を以て吟味してみた。その結果、これまで縷々指摘してきたように、彼の紀行文論には幾多の変転や筆の揺れが見出されるに至った。これを、果たしてどのように考えるべきなのか。この種の筆の揺れは、時に未熟なわたしたちも、推敲の行き届かない未定稿段階でしばしば経験するものであって、花袋も完璧で無矛盾の論理構成を誇る書き手ではなかったということであろうか。わたしたちが広義の学史研究に取り組むとき、対象となる人物は往々にして誰もが知る著名人であって、そのテキスト読解は時に〈無謬性の神話〉に支えられて遂行される。つまり、半ば神格化された人物のテキストに論理矛盾や破綻は存在しないという暗黙前提が、とくに欧米の著名人のテキスト読解に際してしばしば観察される。しかし著名人といえども同じ人間であって、時に筆の揺れや論理矛盾や破綻が見出されてもべつに不思議ではない、という考えを現在のわたしはもっている。そうした落度を査読誌のレフェリーの如く指摘することも必要であろうが、反面、わたしは花袋が複数の二律背反のはざままで揺れ動いてきたこと自体に意義を見出したいとも思う。花袋は、〈知識〉と〈感覚〉、「叙述」と「描写」、そして「山水の勝」と「平凡」という相容れない両極の双方に、それぞれ固有の価値を見出すバランス感覚の持ち主として在った。花袋をして変転や筆の揺れに向かわせた〈力〉とは、花袋がそれらにそれぞれ見出したところの〈固有の価値〉に他ならない。花袋は、それらの二律背反のはざままで揺れ動き、その揺れが花袋の紀行文論の通奏低音として在る、というのがわたしの現段階での見方である。

本稿で再構成された花袋の紀行文論の、地理学史的意義について触れておきたい。一つは、島津(2011: 48)でも示唆したことだが、民間地理学者たる花袋

の紀行文論は、〈地人相関〉から生じる〈地域性〉を把握すべしと命じる点で、近代地理学の地誌論と同種の認識に達しつつあったという点が挙げられよう。率直に言って、地理学の素養が深かった花袋の紀行文論を十全に読み解けるのは、誰よりもまず地理学者であり、さらにいえば地理学史家であるとわたしは思う。彼のテキストは、地理学史の文脈で読まれるべき側面を多く有しているのである。二つ目は、田山花袋の紀行文論と高島北海の画論の共通性に関する点で、いずれも、近代地理学が〈地域〉や〈景観〉と呼んできたところの可視的世界の、まさにその地理学的な認識が、その世界のホーリスティックな詩的認識あるいは美的認識に結びつくと言ったのであった。これらは、地理学史と美術史あるいは文学史の結びつきを示す物言いであるとわたしは思う。三つ目も、地理学史と文学史との結びつきに関する点だが、花袋の紀行文論においては、地理学的な知識と観察がことのほか重視されていた。むしろ地理学者の書き物に彼は不満を表明していたわけだが、それらの書き物が生産される基盤に対して、花袋はむしろ限らない信頼を抱いていたのである。近代の著名な小説家にして紀行文家が、地理学に熱い視線を送っていた。このことの意味を、素朴国民国家論的に斬り捨てるだけでなしに、地理学者はもう一度よく考え直してみる必要があるだろう。

むろん、本稿が積み残した課題は数多い。花袋の紀行文論と紀行文それ自体の連関を検討する必要があるのは勿論だが、変転や筆の揺れを重ねた花袋の紀行文論を、様々なコンテキストに位置づけて捉え直す作業も決して充分とはいえず、これもやはり今後の課題として積み残されている。とくに同時代の他の紀行文論と、花袋の紀行文論がいかに連関していたのかは重要な問題である。例えば花袋に批判された小島烏水は、後に「爾来、私は花袋一派の党同異伐に対して、抑へ難い不平を抱いてゐた」と語っている（小島 1936: 73）。烏水が紀行文論を物していたことは、岩田・佐藤（1991）から判明するが、わたしはまだ目を通すことができていない。花袋の紀行文論と、こうした同時代の紀行文論のせめぎ合いをみる必要性が痛感される。

最後に、I章で言及した立岡氏の批評に対して、本稿の内容と関わる限りにおいて応えておかねばなるまい。花袋の紀行文論における近世紀行文への視線を問題化する必要性に触れた氏の批評は、一般論的な水準においては、〈近代の産物〉というありがたい物言いに象徴される大きな物語への冷や水であって、真摯に受け止めねばならないと思う。しかし本

稿での検討から導き出されたのは、他の紀行文に対する花袋の論評は複雑かつ変転し揺れ動いているというテキスト的現実である。近世紀行文への視線のみに絞っても、花袋はある時は芭蕉や南谿を批判する一方で西鶴や一九を評価し、またある時は一転して芭蕉も南谿も評価するという具合である。明治期の紀行文についても事情は同じであって、ある時は批判された烏水や孤雁が、またある時は誉め讃えられていたりするのだ。従って、「花袋の紀行文論が近世および明治期の紀行文に対する批判として呈示されたものである」とか、「花袋は近世紀行文を否定的に語る」とかといった評言は（立岡 2012: 214）、いったい花袋のいかなる時点でのどのような物言いに基づく評言なのか明瞭されねばならないし、そもそも、かかる断定的な評言で以て花袋の変転する視線を果たして適切に表現しうるのかどうか、改めて問われねばならないであろう。また、本稿での検討から窺えることは、花袋の紀行文論が「近世および明治期の紀行文に対する批判」として呈示されたというより、むしろ西洋文学への憧憬や評価との絡みで呈示されてきた側面が大きいということである。西洋文学に対する評価規準が、徐々に近世期や明治期の紀行文に対する評価規準に影響を与えていった可能性が高いということでもある。さらに、島津（2011）による「月夜の和歌の浦」の読解に関して、立岡氏は、花袋の「近世および明治期の紀行文に対する批判」も「テキスト生産の時空間的背景」の検討のなかに含めるべきとする。しかし「月夜の和歌の浦」が『南船北馬』に所収されるかたちで発表されたのは1899（明治32）年であって、その時点で花袋が近世や同時代の紀行文にいかなる視線を注いでいたのかは、同時代の花袋の紀行文論が発見されない以上、実証的に明らかにすることはそもそも困難である。この点を踏まえううえで書くのだが、花袋は1907（明治40）年の〈第二の起点〉の段階で、「明治以前」の紀行文を、確かに叙事一点張りで「土地のにはひ」がないと批判した（VI章参照）。その視線が「月夜の和歌の浦」の執筆当時から存在し、そのおかげで花袋が抒情に満ちた「月夜の和歌の浦」を書き上げたというのであれば、立岡氏の批評にも一理あることになる。しかし〈第二の起点〉で花袋が「明治以前」の紀行文を批判した理由は、「土地のにはひ」が無いことであって抒情が無いことではない。なぜなら、同じ〈第二の起点〉で花袋は、むしろ抒情に満ちた『南船北馬』の類をも、すなわち過去の己の振舞いをも批判していたからである（II章参照）。あるいは、「月夜の和歌の浦」が、「明治以前」の紀行文批判に呼応

して、意識的に「土地のほひ」を込めて書かれたというのであれば、立岡氏の批評にも一理あることになるが、「月夜の和歌の浦」は、そこに花袋が「土地のほひ」を意識的に込めて書いたというより、むしろ「旅行記は文学なり……空想にてもありぬべし」という花袋の紀行文論の〈第一の起点〉に繋がる認識のもとで書かれた側面が強いと理解すべきである(島津 2011)。むろん地名「にしかし」の挿入に象徴される如く、後の「土地のほひ」に結びつく内実が皆無であったわけではない。しかし花袋が「土地のほひ」云々をいい、それに絡めるかたちで「明治以前」の紀行文を論評し始めた最初の文章は、管見の限り1907(明治40)年の「紀行文について」であって、1899(明治32)年の『南船北馬』刊行の時点で、花袋がかかる認識を明示的に有していたかどうかは不明である。というより、花袋の明治以前の紀行文に対するまなざしは、彼の〈第二の起点〉の一部として顕われたのであって、その〈第二の起点〉とは自らの〈第一の起点〉を半ば否定することにより形成されたのであった(II章参照)。従って、花袋の「明治以前」の紀行文へのまなざしを、「月夜の和歌の浦」という「テキスト生産の時空間的背景」の一部に含めるべきという立岡氏の批評は、当を得ているとはいえない。立岡氏の批評は、一般論的な水準においては意義なしとしないが、個別具体的な批評としては、〈仇名としての印象批評〉に近いといわざるをえない(戸坂 1938: 228)¹⁹⁾。これが、本稿の内容に関わる限りでの、立岡氏の批評への応答である。

付記

立岡裕士氏(鳴門教育大学)は、本稿執筆のきっかけの一つを与えて下さり、また口頭や電子メールでのやりとりを通じて、有益な示唆を与えて下さった。記してお礼申し上げます。

注

- 1) 人物の生没年は、とくに断らない限り『角川新版日本史辞典』(朝尾ほか 1996)によった。
- 2) 目を通した先行研究を刊行年順に挙げておく。丸山(1974)、宮内(1977)、欄木(1981)、谷口(1981)、榎本(1982)、藤田(1983, 1985)、持田(1986, 2000)、岡本(1987)、五井(2000a, b, c, 2008)、佐々木(2001)、石崎(2002)、馬(2002)、水野(2007)、光石(2011)、小堀(2012)。
- 3) 花袋は「旅行記」および「紀行文」という文言を、自らの著

作活動を通じて厳密に使い分けていたというより、むしろ互換的に用いていたようである。時に微妙な意味の差異も見受けられるが、この点を本稿では問題化していない。

- 4) 以下、刊行年月日の考証は宮内(1995)による。
- 5) 従って、島津(2011: 59)の「つまり「空気」とは、場所の間主観的な「直覚的印象」……なのであって」のくだりは、修正を余儀なくされる。本稿のI章における、「直覚的印象」と「万人行つて見ても成程と点頭く空気」の等置も同様である。
- 6) アーサー・ウィリアム・シモンズ Arthur William Symons (1865-1945)。英国の詩人・批評家・編集者。http://en.wikipedia.org/wiki/Arthur_Symons (最終閲覧日: 2013年2月6日)。「ベニス紀行」の原典は、Symons (1903: 59-88)に所収された“Venice”であろう。
- 7) アルフォンス・ドーデ Alphonse Daudet (1840-1897)。仏国の小説家・劇作家。http://fr.wikipedia.org/wiki/Alphonse_Daudet (最終閲覧日: 2013年2月6日)。
- 8) 小島烏水に関しては岩田・佐藤(1991)を参照した。『日本アルプス』は全四巻で、「現代の紀行文」の時点では第一巻と第二巻が刊行されていた。
- 9) とはいえ同じ「現代の紀行文」で、幸田露伴は「作者と事実と巧につづいて」いる点が、つまり「叙述」が評価されたのであって(無署名 1911b: 77)、「描写」と「叙述」のはざまに揺れる花袋の姿には事欠かない。
- 10) むろん花袋の地理学者へのまなざしはアンビヴァレントであって、批判一辺倒ではありえない。三年後に出た『旅と紀行文』では、次のように書かれている。「しかし、何と言つても、地理学者は矢張り一番よく歩いてゐる。……従つて地理学者の書いたものは、文章は職を嘯むやうで拙いが、その書いてあることには、非常に有益なことが多かつた。紀行文を書く人に取つても、また単に旅行をする人に取つても、従つてその研究乃至報告は、非常に利益の多いものであつた」(田山 1920: 83-84)。
- 11) スウェン・ヘディン Sven Hedin (1865-1952)。スウェーデン出身の地理学者・探検家。http://de.wikipedia.org/wiki/Sven_Hedin (最終閲覧日: 2013年2月19日)。花袋のいう『探検記』の原典は明らかでない。田山花袋記念文学館には、300冊を超える花袋旧蔵の洋書が所蔵されるが、ヘディンの書物は目録にみられない(田山花袋記念館 1989: 123-131, 1998: 61-65)。
- 12) 『趣味の紀行文』(田山 1917)における他の紀行文への評言は、冒頭の「紀行文の作り方」にみられるほか、本篇たる「作例二十二篇」における個々の作品の末尾にも、丸括弧を付して記載されている。後者のうち、14篇の作品に対する花袋の評言は、後に『花袋紀行集 第三輯』に「諸家の紀行文短評」として纏めて所収された(田山 1923b: 657-672)。しかし後者では、何という作品に関する短評なのか明記されず、文脈が読み取りづらくなってしまっている。『田山花袋書誌』(宮内 1989: 233)では、この『花袋紀行集 第三輯』所収の「諸家の紀行文短評」の初出が記載されず、『花袋紀行集 第三輯』が初出である

- かのような扱いとなっているが、初出は六年前の『趣味の紀行文』である。なお、この『田山花袋書誌』の不備は、後に宮内(1990: 98)によって訂正されている。
- 13) ピエール・ロティ Pierre Loti (1850-1923)。仏国の小説家・海軍将校。http://fr.wikipedia.org/wiki/Pierre_Loti (最終閲覧日: 2013年2月20日)。
- 14) ラドヤード・キップリング Rudyard Kipling (1865-1936)。英国の小説家・詩人。http://en.wikipedia.org/wiki/Rudyard_Kipling (最終閲覧日: 2013年2月24日)。田山花袋記念文学館にはキップリングの著作が3冊所蔵されるが、『インランド、ポエーチ』の原典は明らかでない(田山花袋記念館 1989: 126)。
- 15) ギュスターヴ・フロベール Gustave Flaubert (1821-1880)。仏国の小説家。http://fr.wikipedia.org/wiki/Gustave_Flaubert (最終閲覧日: 2013年2月24日)。「ブリタニイ紀行」の原典は Flaubert (1904: 1-125) に所収された“Over strand and field: A record of travel through Brittany”であろう。
- 16) 田山花袋記念文学館にはドーデの著作が9冊所蔵されるが、『ボオ島へ』の原典は明らかでない(田山花袋記念館 1989: 124, 1998: 61)。
- 17) アンリ・ルネ・アルベール・ギ・ド・モーパッサン Henry-René-Albert-Guy de Maupassant (1850-1893)。仏国の小説家。http://fr.wikipedia.org/wiki/Guy_de_Maupassant (最終閲覧日: 2013年2月24日)。「水の上」は、モーパッサンの英訳全集に基づく和訳が1913(大正2)年に刊行されている(モウパッサン 1913)。
- 18) http://merlot.wul.waseda.ac.jp/sobun/y/yo010/yo010p01.htm#pic (最終閲覧日: 2013年2月27日)。ただし花袋は「現代の紀行文」において、孤雁の新著『旅より旅へ』(吉江 1911)に辛口の批評を寄せていた。つまり「抒情を専らにしたもので」、「筆はまだ正確でない。動揺してゐる。そしてその動揺は知識の感情に蔽はれたところから起つて来る動揺である」(無署名 1911b: 76)と書いていたのであった。
- 19) 戸坂 潤はこう書いている。「印象批評といふ言葉には三つの意味がある。一つは一切の批評は印象から出発するといふ根本事実をさういふ言葉でやゝ不用意に云ひ表はすものである。第二は、即興的放言を以て批評に代へると考へる処の、括弧づきの所謂「印象批評」だ。之は仇名である。第三は、身辺私小説の持つ厳しさにならへ得るやうな上乘の印象批評だ」(戸坂 1938: 228)。
- 近代文化研究所。
榎本隆司 1982. 紀行作家としての独歩と花袋. 国文学 解釈と鑑賞 47(8): 156-163.
岡本 勲 1987. 明治紀行文学の文章—田山花袋・大町桂月について. 中京大学文学部紀要 21(3・4): 1-25.
五井 信 2000a. 鉄道・(日本)・描写—田山花袋の紀行文『草枕』をめぐる. 二松学舎大学論集 43: 53-75.
五井 信 2000b. 書を持って、旅に出よう—明治三〇年代の旅と〈ガイドブック〉〈紀行文〉. 日本近代文学 63: 31-44.
五井 信 2000c. 表象される〈日本〉—雑誌『太陽』の「地理」欄 1895-99. 金子明雄・高橋 修・吉田司雄編『ディスクールの帝国—明治三〇年代の文化研究』240-272. 新曜社.
五井 信 2008. 『田山花袋一人と文学』勉誠出版.
幸田露伴 1893. 『枕頭山水』博文館.
小島鳥水 1910-15. 『日本アルプス(全四巻)』前川文栄閣.
小島鳥水 1936. 『アルピニストの手記』書物展望社.
小堀洋平 2012. 明治三十年前後の紀行文におけるジャンルの越境と人称の交替—田山花袋『日光』を中心に. 日本近代文学 87: 17-32.
佐々木基成 2001. 〈紀行文〉の作り方—日露戦争後の紀行文論争. 日本近代文学 64: 29-41.
鳥津俊之 2011. 経験とファンタジーのなかの和歌の浦—田山花袋「月夜の和歌の浦」を読む. 空間・社会・地理思想 14: 41-67.
鳥津俊之 2012. 地理学者としての高島北海. 空間・社会・地理思想 15: 51-75.
立岡裕士 2012. 学界展望 学史・方法論. 人文地理 64: 214-216.
谷口智彦 1981. 欄木寿男「田山花袋と小林秀雄の朝鮮紀行文」について. 朝鮮研究 215: 44-49.
田山花袋 1899. 『南船北馬』博文館.
田山花袋 1901. 『続南船北馬』博文館.
田山花袋 1906a. 『日本新漫遊案内』服部書店.
田山花袋 1906b. 『美文作法』博文館.
田山花袋 1909a. 旅と旅行記. 中学世界 12(8): 76-81.
田山花袋 1909b. 『小説作法』博文館.
田山花袋 1911. 『花袋文話』博文館.
田山花袋 1917. 『趣味の紀行文』アルス.
田山花袋 1920. 『旅と紀行文』博文館.
田山花袋 1923a. 『京阪一日の行楽』博文館.
田山花袋 1923b. 『花袋紀行集 第三輯』博文館.
田山花袋 1927. 『古人の遊跡』博文館.
田山花袋記念館 1989. 『田山花袋記念館収蔵資料目録Ⅰ』館林市教育委員会.
田山花袋記念館 1998. 『田山花袋記念館収蔵資料目録Ⅱ』館林市教育委員会.
戸坂 潤 1938. 所謂批評の「科学性」についての考察. 文芸 6(1): 224-235.
藤田叙子 1983. 釈道空『安乗帖』と田山花袋『南船北馬』—「海やまのあひだ」成立の一過程. 芸文研究 45: 45-66.
藤田叙子 1985. 紀行文の時代(一)—田山花袋と柳田国男. 三田国文 3: 33-38.
馬 京玉 2002. 花袋の紀行文学と歴史小説との接点としての—

文献

- 朝尾直弘・宇野俊一・田中 琢編 1996. 『角川新版日本史辞典』角川書店.
石崎 等 2002. 〈満鮮〉への旅—大正期における桂月・花袋の異郷体験. 立教大学日本文学 88: 30-39.
岩田光子・佐藤道子 1991. 小島鳥水. 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第65巻』179-316. 昭和女子大学

- 方法—『満鮮の行楽』を手掛かりに. 花袋研究学会々誌 20: 1-11.
- 丸山幸子 1974. 田山花袋試論—紀行文に関する一考察. 国文学試論 1: 13-18.
- 光石亜由美 2011. 紀行文作家・田山花袋—明治期, 奈良への旅を中心に. 奈良大学紀要 39: 89-114.
- 水野達朗 2007. 田山花袋『満鮮の行楽』の戦略. 比較文学・文化論集 24: 75-85.
- 宮内俊介 1977. 初期田山花袋論—紀行文と小説の谷間. 芸文研究 36: 222-233.
- 宮内俊介 1989. 『田山花袋書誌』桜楓社.
- 宮内俊介 1990. 『田山花袋書誌』補訂(一). 文学研究パンフレット花袋とその周辺 12: 87-100.
- 宮内俊介 1995. 著作年表. 定本花袋全集刊行会編『定本花袋全集 別巻』109-224. 臨川書店.
- 無署名 1907. 紀行文について. 文章世界 2(7): 60-64.
- 無署名 1909. ローカル, カラー. 文章世界 4(6): 179-181.
- 無署名 1910. 文章新語. 文章世界 5(10): 2-7.
- 無署名 1911a. 新しい紀行文. 文章世界 6(6): 24-27.
- 無署名 1911b. 現代の紀行文. 文章世界 6(14): 72-81.
- モウパッサン, G. de 著, 吉江孤雁訳 1913. 『水の上』中興館.
- Maupassant, G. de 1903. *Sur l'eau, or, on the face of the waters*. Akron, Ohio: St. Dunstan Society.
- 持田叙子 1986. “紀行文の時代”と近代小説の生成—習作期の田山花袋を中心に. 国学院雑誌 87(7): 13-29.
- 持田叙子 2000. 青年, 歩行, 紀行文. 花袋研究学会々誌 18: 3-10.
- 欄木寿男 1981. 田山花袋と小林秀雄の朝鮮紀行文. 海峡 10: 53-57.
- 吉江孤雁 1911. 『旅より旅へ』中興館書店.
- Flaubert, G. 1904. *The temptation of St. Antony, or, a revelations of the soul*. Chicago: Simon P. Magee.
- Symons, A. 1903. *Cities*. London: J. M. Dent.